

生方美久

「踊り場にて」

登場人物

美園 舞子 (29)

高校教師

金子 飛鳥 (17)

高校二年

バレーボール部

佐藤 正宗 (17)

高校二年

丸沢 百恵 (18)

高校三年

宮内 悟 (32)

高校教師

舞子の同僚

美園 優子 (58)

舞子の母

光輝 (18)

高校三年

小出

面接官

堤

面接官

女子生徒

○ホール・ステージ上

バレエのコンクール。

華麗に舞うバレリーナたち。

舞台袖にいる美園舞子（29）、呼吸を整え、ステージへ。

○電車内（夜）

ガラガラの車内。

舞子、椅子にだらしなく腰掛け、ペット

ボトルのコーラを飲む。

虚ろな表情で小さくゲップ。

スマホにLINEの通知音。

『お母さん』の表示。

『お疲れさま。諦めはついた？』と。

スマホ画面を数秒見つめ、返信せずに

スマホを適当に座席に放る。

スニーカーの爪先を床に立てる。

涙が頬を伝う。

再びコーラを飲み、小さくゲップ。

○上崎高校・面談室（数か月後）

舞子、スーツ姿で面接を受けている。

中年男性の面接官・小出と、中年女性の面接官・堤。

小出「二年間、教育現場を離れていたんですね？」

舞子「はい。バレエで海外に行っていました」

小出「すごいねえ、海外」

舞子「……はい。オーディションに参加するために海外に拠点を置いていましたが、年齢的にも厳しくて」

小出「えーつと、二十……（履歴書を見て）

九。29歳かあ、それってバレエ的にはもうおばさんなの？」

と、冗談交じりに笑う。

舞子、一瞬表情が強張るが、なんとか笑顔をつくり、

舞子「そうですね。十代から活躍するのが当たり前前の世界なので」

堤「そうわかってて、前の学校辞めてまで海

外行ったんでしょ？ 思い切ったわねえ」

舞子「はい……どうしても諦められなくて」

小出「再就職を考えたのは、どんな経緯で？」

舞子「最後のチャンスと決めていたコンクールで結果が残せなかったので。帰国と就職を決めました」

堤「才能がなくて諦めたってことね」

言葉に詰まる舞子。

堤「（ハツとして）……あ、ごめんなさいね、無神経に」

舞子、パンプスの爪先を一瞬床に向けて立てる。

舞子「（にこやかに）はい。諦めました。これからは教師として、また教壇に立ち、生徒たちや学校に貢献したいと考えております。よろしくお願いします」

小出と堤、目を合わせたのち、

小出「ちょうど国語の教員が来月から産休に入りますので、ぜひよろしくお願いします」
舞子「はい。よろしくお願いします」

と、笑顔をつくる。

舞子M「諦めました。初めてハッキリと口に出したそのとき、ピシッと張っていた糸が緩まった感じがした」

堤「詳細は追って連絡致します。本日はありがとうございました」

舞子「ありがとうございます。よろしくお願い致します」

頭を深々と下げ、部屋を出ていく。

× × ×

涙目で廊下を歩く舞子。

舞子M「バレエでプロになることを諦めた私は、他にどんな仕事をすればいいかもわからず、のこのこと教師に逆戻りした」

舞子、パンプスをコツコツと鳴らしながら階段を降りていく。

踊り場で立ち止まる。

舞子M「学校なんて、大人になったらなんの役にも立たない知識を必死に頭に詰め込んだり、意味もなくボールを追いかけてたり、

速く走ったり」

手すりに片手をかけ、姿勢を正す。

踵を少し上げるが、すぐに下ろす。

何事もなかったように階段を降りていく。

その様子を階段の上から見ていた、女

子生徒・金子飛鳥（17）。

バレエボール部のジャージ姿。

舞子の姿に見とれて立ち尽くす。

生徒1「飛鳥、行くよー」

飛鳥「ああ、うん」

と、友人に声を掛けられ歩き出す。

× × ×

一階の廊下、玄関に向かって歩く舞子。

舞子M「友情をはぐくんだり、恋愛をしたり、

失恋してみたり。そういうのを全部ひっく

るめて青春って呼んでキラキラさせて、大

人を悲観させたりもする」

ギターバッグを背負った男子生徒・佐

藤正宗（17）とすれ違う。

舞子「（軽く会釈し）こんにちは」

正宗「……ちわ」

と、適当に挨拶。

振り返り、舞子を見つめる。

颯爽と歩き続ける舞子の後姿。

× × ×

校門の前でそわそわと誰か待っている

様子の女子生徒・丸沢百恵（18）。

校門を出る舞子。

舞子「（軽く会釈し）さようなら」

百恵「……」

舞子に見とれる百恵。

まっすぐに駅へ歩いていく舞子。

舞子M「そんな場所、なんだか夢が詰まってるみたいで、息苦しいに決まってるのに。

決まってるのに、夢破れた直後に、舞い戻ってしまっただけ

× × ×

階段を上がる飛鳥。

踊り場で立ち止まり、じっと窓の外を

見つめる。

○同・職員室（朝）

舞子、誰もいない職員室でデスクを整理する。

同僚・宮内悟（32）、出勤。

宮内「あっ、おはようございます」

舞子「（慌てて立ち上がり）あ、おはようござ

ざいます。本日からお世話になります。美

園です。よろしく願います」

宮内「宮内です。早いですね」

舞子「ああ、はい。初日なんで。先生も早い

ですね」

宮内「はい。僕、卓球部の顧問で、朝練あつ

て……あ、体育館案内しましょうか？ 美

園先生も朝練ありますよね？」

舞子「……？」

○同・体育館（朝）

宮内に連れられ、体育館へ入る舞子。

宮内「バレー部は……あ、あの辺でやってますね。朝練。あんな感じで放課後も基本この体育館でやってて、練習試合とか、合同練習とか？　なんか別の学校とやることも多いらしいんで、その辺はバレー部の子にいろいろ聞いてください」

舞子「ああ、はい……」

と、不安そうな舞子。

宮内「まだ聞いてなかったんですね。顧問のこと。すみません。フライングですね」

舞子「フライングしたことは全然いいんですけど……」

宮内「いやあ、おかしいなあと思いました。

随分華奢だなあって」

舞子「バレーボール……」

宮内「バレー、バレ……（腕で頭の上に円をつくり）バレエ？　だったんですね。すみません、なんか。いろいろ伝言ゲームになっちゃって、バレーボールで海外でバリバリやってた選手って噂で……すみません」

舞子「（失笑し）伝言ゲーム大失敗ですね」

宮内「（楽し気に笑い）大失敗ですね！」

舞子「……顧問は確定なんですかね？」

宮内「安田先生が……あ、あの産休に入った」

舞子「はい。安田先生」

宮内「安田先生がバレー部の顧問だったんですよ。なんで、どっちにしろやらされると

思いますよ」

舞子「はあ……いや、あの、私バレエ……バレーボールはルールもよくわかんないレベルなんですけど」

宮内「ああ、大丈夫ですよ。外部コーチが基本付きっ切りなんで。顧問ってほら、形だけでも学内の先生が責任的な感じで、いないとダメなんですよ」

舞子「……ですよね。はい」

宮内「前の学校は？ 顧問何してました？」

舞子「茶道部でした。それも形だけの。私、

お抹茶苦手」

宮内「お抹茶苦手な茶道部顧問。お紅茶のほ

うが似合いますもんね」

舞子「すみません……」

宮内「でも、踊りのほうはプロレベルってことですよ？ 見てみたいです」

舞子「プロになれなかったレベルです」

宮内「（気まずそうに）……すみません」

舞子「いえ、すみません」

宮内「でも、すごいですよ。プロ目指してたってことがすごいです。諦めて、教師に戻ってきたのも、すごいと思います。僕はこの仕事しかしたことないし……まあ、他に夢とかなないからですけど。夢があるってすごいです。羨ましいです。生徒にも示しがつきますよ。子供は夢持った方がいいですから。ほんと、羨ましいです」

舞子「（小声で）夢がないって、羨ましいです……」

宮内「え？ ……危ないっ！」

舞子の頭にバレーボールがヒット。

倒れる舞子。

静まり返る体育館。

○同・保健室

舞子、ベッドで目を覚ます。

飛鳥、舞子に気付き、

飛鳥「あつ大丈夫ですか？ すみません、私が打ったスパイクで……すみません」

と、仕切りのカーテンから顔を出す。

舞子「（辺りを見渡し）……え、病院？」

飛鳥「保健室です」

と、カーテンを勢いよく開ける。

舞子「……そうだ、勤務初日だ……」

飛鳥「ですよ。すみません。あ、はじめまして。バレー部の金子飛鳥です。顧問よろしくお願ひします。あ、担任も」

と、深々と頭を下げる。

舞子、ベッドの上で正座をして、

舞子「ああ……よろしくお願ひします……お抹茶飲めないけど」

飛鳥「お抹茶？」

舞子「……違う、間違えた。バレエボールのルールもよくわかんないけど、頑張ります。すみません」

飛鳥「（脱力して笑い）逆によかったです」

舞子「……良くはないと思うけど。逆とかないと思うけど」

飛鳥「（笑いを堪えつつ）すみません、すみません。いや、なんか、海外のチームでプレー経験のある元バレエ選手って噂だったから……こんな細くてか弱い感じの先生来てみんな拍子抜けして」

舞子「……すみません」

飛鳥「いえいえ、そもそもコーチがバリバリ練習メニュー組んで見てくれるし、そこにそんな強烈な顧問来たらって考えたらみんなビビっちゃって。今より練習きつくなったらどうしようって。だから逆に良かったんです。安田ちゃんも……あ、産休入った先生。も、バレエのことは全然で、形だけの顧問だったんで。だから先生も別に頑

張んなくて大丈夫ですよ」

舞子「……そっか」

飛鳥「ただ、安田ちゃん、お菓子作りが趣味で、よく差し入れしてくれました。美園先生にもそこだけ見習ってもらえると嬉しいです」

舞子「お菓子作りかあ……」

飛鳥「安田ちゃん、試合直前に、食べてー！気合入れて作ったからー！とか言ってお菓子食べさせようとするんですけど、それが大概クッキーとかマフィンとかで。いや、口の水分持つてかれるから！つていう。しびれ切らしたコーチに怒られたこともあって。部員的には地獄っすよ。顧問がコーチに怒鳴られてんの」

舞子「へえ……」

飛鳥「コーチ、安田ちゃんのキャラ苦手っぽくて、大会とかのいろんな手続きみたいな、顧問がやらなきゃなのにその二人が全然コミュニケーション取れないからほぼ部

長がやってて。部長的には両親が不仲の家の長女の気分らしいです。うける」

舞子「ほお……」

飛鳥「安田ちゃんの妊娠がわかったとき、コ―チなんて言ったと思います？」

舞子「さあ……」

飛鳥「おめでとう！ 産んだら！ すぐ！

二人目を妊娠するといいよ！ ……って」

と、一人ケラケラと笑う飛鳥。

舞子「おお……」

飛鳥「安田ちゃん元気かなあ。生まれたての子にクツキ―食べさせそうで心配」

舞子、居心地悪そうにしている。

飛鳥「てか、なんでそんな噂立ったんですかね？ 美園先生がバレーボール選手って」

舞子「ああ、私バレエやってたから、それで見たい」

飛鳥「バレエ……あつ、バレリーナのバレ

エ！？」

舞子「そう」

飛鳥「先生バレリーナなの!？」

舞子「ん、まあ、バレエやってたから……やめたけど」

飛鳥「へえ、すごい! バレリーナ! 憧れる! 女の子って感じ!」

舞子「女の子……ありがとう」

飛鳥「なんでやめちゃったんですか?」

舞子、返答に困り愛想笑いしながら、

舞子「……なんでだろうね」

飛鳥「嫌いになりました?」

舞子「好きだよ。踊ることは、すごく」

飛鳥「そっか……先生」

舞子「ん?」

飛鳥「ホームルーム始まっちゃう」

○同・二年三組教室

教壇に立つ舞子。

舞子「産休の安田ちゃ……安田先生の代わりに今日から担任をします、美園舞子です。よろしくお願いします」

生徒たち「よろしくお願いします」

と、数人が小声で返答する。

舞子「えーつと……国語。国語の担当です。

部活も安田先生の代理なのでバレエ……バ、

バレイ……ん？　ば、バレエボール部！

で、お世話になります！」

隅の席でクスクス笑っている飛鳥。

舞子「……安田先生が戻るまでの短い期間だ

し、私あの、二年くらい学校を離れて違う

ことしてたので、教壇に立つのも久しぶり

で、だから……うん。（笑って）よろしく

お願いします」

○同・職員室

デスクに着く舞子。

宮内「美園先生、お疲れ様です」

舞子「はい、疲れました。すっごく」

宮内「（笑って）正直ですな……頭、大丈夫

ですか？」

舞子「ああ、まあ、たぶん」

宮内「三組は比較的落ち着いた子が多いんで、
厄介なことないとは思うんですけど、まあ、
なんかあれば相談してください」

舞子「はい……」

○同・二年三組教室

帰りのホームルームが終了。

舞子、荷物をまとめ、教室を出ようと
廊下に向かう。

近くにいたギターバッグを背負った正
宗、友人に呼び留められ振り返る。

その拍子にギターバッグが舞子の頭を
強打。

ギターの鈍い音が響く。

正宗「……あ」

舞子「（頭を抱えながら）あ、頭……今日ほ
んど……頭……あた……」

正宗「すみません……」

舞子「（痛みでうずくまり）すみませんじゃ
ないわよ……」

正宗「……ごめんなさい」

見て見ぬふりをする他の生徒たち。

○同・廊下

舞子、氷嚢で頭を冷やししながら保健室から出てくる。

廊下で待っていた正宗。

舞子と目が合い、

正宗「……申し訳ありませんでした」

舞子「……いいから、帰りな」

と、職員室へ歩き出す。

正宗、後について歩き、

正宗「勤務初日に二回も保健室くるってエグいですね」

舞子「（小声で）全然反省してねえな」

正宗「先生バレエ部ですよね？ 顧問。これから部活大丈夫ですか？」

舞子「大丈夫……たぶん突っ立てるだけだから。ほんと、なんでバレエ部……」

正宗「踊りのバレエ、なんですよね？ ほん

とは。やってたの」

舞子「うん……なんで知ってるの？」

正宗「高校生の情報網なめないでください。

みんなヒマなんですから」

舞子「ヒマから生まれるのはウワサだけよね」

正宗「バレール部、似合わないですね」

舞子「どうも。君は……ごめん、名前なんだ

っけ？」

正宗「マサムネです」

舞子「マサムネ……なんて苗字いたかな」

正宗「名前です。苗字嫌いで。早く婿に行き

たいです」

舞子「令和だなあ……」

正宗「佐藤です、苗字」

舞子「普通じゃん」

正宗「普通だから嫌なんです。佐藤って日本

で一番多い苗字なんです。全国に200万人

以上いるんです。全国の佐藤たちが手違い

で同じCDを買っちゃったら、それ、ダブ

ルミリオンセールスになるんです」

舞子「アーティストの人生変えちゃうね」

正宗「苗字でいう佐藤って、犬でいうポチです。猫でいうタマです。生まれた瞬間から名前ハラスメントですよ」

舞子「（圧倒される）……佐藤くんは軽音楽部？」

正宗、大きく溜め息。

舞子「……え、なに。正宗くんって呼んだ方がいいの？ でもそういうの他の先生に聞かれたとき説明めんどくさいし、ほら、私一応20代の女性教員だしさ。前の学校でもわりと男子から人気で、」

正宗「ギター背負ってるから軽音部だと思っただ。そういうことですか？」

舞子「……うわぁ、何この子、めんどくさ」

正宗「心の声漏れすぎです。ギター背負ってるから軽音部だと思ったんですよね？」

舞子「そうですけど……」

正宗「結論から言います。軽音部じゃないです」

舞子「はい……ごめんなさい」

正宗「なんなんすか？ 軽音楽って。軽い音楽って。バカにしてんすか、まじで」

舞子「してないです……ごめんなさい」

正宗「軽いってというのが、ほんと、腹立つ。

僕は重低音が好きなんすよ」

舞子「そうですか……」

正宗「藤井聡太くんは将棋部だと思いますか？」

舞子「……え？」

正宗「藤井聡太くんは将棋部だと思いますか？」

舞子「部活には所属してないんじゃないかな……知らないけど」

正宗「はい。藤井聡太くんは将棋部じゃないです。そういうことです」

舞子「そうですか……」

正宗「ほんとわかってない。みんな、部活で仲良しごっこしたいだけなんすよ」

舞子「……なんでイライラしてるの？」

正宗「思春期だからです」

舞子「その自覚あるんだ。すごいね」

職員室の前に着く。

舞子「……じゃあ、気を付けて帰ってね」

と、職員室に入ろうとする。

正宗「先生」

舞子「（振り返って）ん？」

正宗「バレエって、続けてるんですか？」

舞子「……続けてないよ。諦めたからね」

と、微笑み、職員室へ入っていく。

正宗「……」

正宗、ギターバッグを背負い直し、廊下を歩いていく。

○同・体育館

バレエ部の練習中。

舞子、体育館の隅で、部員名簿や練習

メニュー、大会の要綱などに目を通す。

飛鳥「休憩！」

部員たち「休憩です」

飛鳥、舞子の元に駆け寄り、

飛鳥「大丈夫ですよ、そんな紙、必死に見な
くても。練習見てください」

舞子「練習見てもわかんないもん」

飛鳥「（笑って）そうだった」

舞子「金子さんすごいね。リーダーなんだね」

飛鳥「（吹き出して）キャプテンです」

舞子「あ、そう。キャプテンキャプテン」

飛鳥「一応エースなんです」

舞子「うん。素人目に見ても、一番上手」

飛鳥「嘘！ ほとんど見てないじゃん！」

舞子「バレた。大学も推薦狙ってるの？」

飛鳥「……あー、うん、まあ、そんな感じは

あるけど、どうですかね。どうだろ」

舞子「大学でもやるなら、今から実績とか調
べておいたほうがいいよ」

飛鳥「うーん、まあ、まだ2年だし」

舞子「もう、2年の冬でしょ。あつという間
だよ。こっからの一年は、ほんと一瞬」

飛鳥「そうですよねえ……」

と、浮かない表情。

舞子「エース、随分自信なさげじゃん」

飛鳥「……先生、バレエ始めたの、いつ？」

舞子「5歳。地元小さいバレエ教室があつて、そこで」

飛鳥「先生、小さいころ言われたんじゃない？」

い？ 上手だねえ、天才だねえ、才能あるねえ、って」

舞子「……うーん、どうだったかなあ」

と、笑ってごまかす。

飛鳥「だから、プロ目指したんでしょ？ バ

レリーナになろうと思ったんでしょ？」

舞子、思い当たる節がある様子。

飛鳥「ここで一番だからって、外でも一番なんて保証、どこにもないよ。先生よくわかってるでしょ」

舞子、愛想笑いで返事を濁す。

飛鳥「県大会ダメだったら、高校で終わりにしようかなって」

舞子「……そっか」

飛鳥「（笑って）止めないの！？ 止めてよ
く。金子さんはバレエの才能がある！ 続
けるべきよ！ って顧問っぽい熱い言葉か
けてよ」

と、ふざけて見せるが、涙目。

飛鳥「諦める前とさ、」

舞子「…：うん」

飛鳥「諦めた後って、どっちがツライ？」

舞子「…：諦めるかどうかを悩んでるときが、
一番ツライかな」

○美園家・リビング（夜）

ソファでだらしなく横になる舞子。

母・美園優子（58）、近くに腰掛け、

優子「そこで寝ないでよお。お風呂入っちゃ
いなさい」

舞子「ううくん」

優子「もお、情けない返事して」

舞子「こんなに疲れるんだっけ…：年かな」

優子「初めてのこと、慣れないこと、久しぶ

りのこと。子供だつて疲れるわよ」

舞子「バレエとバレボールの話ばっかで疲れた。それと時々軽音楽」

優子「いや、ほんとバレボール部の顧問は洒落がきいてるわ」

舞子「ほんといい迷惑」

優子「部員にバカにされたでしょ？」

舞子「そんなことないよ。バレリーナすごい。女の子みたい。素敵ー。かわいいー。つて言われたもん」

優子「（笑つて）バカにされてる」

舞子「……なんか、自分よりずっと若い子に、夢を諦めるの諦めないのつて話されて、ちよつときた。メンタルにきた」

優子「人間は二種類に分けられるでしょ？」

と、机にある一房のバナナを手取る。

舞子「……うわ、嫌いな話の切り口」

優子「夢を持つ人と、持たない人」

と、バナナを二つに分ける

舞子「……」

優子「夢を持つ人は、夢を追いかけると、
追いかけない人に分けられるでしょ？」

バナナをさらに二つに分ける。

舞子「……うん」

優子「夢を追いかける人は、どう分けられる
と思う？」

舞子「……」

優子「夢を諦める人と、諦めない人よ」

バナナを一本ずつに分ける。

舞子「……そうだよ。私は夢を諦めた人だよ。
だからなに？ もっと頑張ればよかったっ
て話？ 諦めるべきじゃなかったって話？
諦めついたかって真っ先に聞いてきたのお
母さんじゃん！ もうわかりきってたの。
諦めるべきだったとこまで行ったの。だか
ら諦めたの！」

と、優子に怒鳴る。

優子「……夢を諦める人も諦めない人も、
『夢を追いかけた人』だ、って話よ？」

と、最後に分けたバナナを二本まとめ

て見せる。

舞子、リビングを出ていく。

優子、バナナを一本食べ始める。

○同・舞子の部屋

舞子、逃げるように自室へ。

本棚に、バレリーナ時代のアルバムや、
バレエダンサーのエッセイなど。

バレエ関連の本をすべてどかし、教育
本を置く。

隙間が空き、カバンから「はじめての
バレエボール」を出し、本棚へ。

○上崎高校・廊下

舞子、クラス名簿の名前を小声でつぶ
やきながら廊下を歩いている。

三年一組の教室前を通りかかる。

百恵とクラスメートの光輝（18）、
教室内で話している。

思わず隠れる舞子。

光輝、一人で教室を出ていく。

舞子、気付かれないように廊下を静かに歩く。

百恵、ゆつくりと椅子に座ると、自ら机に頭を強打する。

舞子、つい教室に顔を出し、

舞子「頭！？　頭はダメ！　大事にして！

（我に返り）……え、大丈夫？」

百恵「（大声で）大丈夫じゃないです！」

舞子「ですよね！　ごめんなさい！」

と、つられて大声で返答する。

静かに泣き出す百恵。

舞子、その場を離れにくい雰囲気。

ゆつくりと近付きながら、

舞子「……別れ話的な？」

百恵「別れ話してみたいです！　超憧れで

す！　羨ましいです！　だって別れ話って

付き合ってるからできるんでしょ！？　羨

ましくてハゲそうです！」

と、一息に話す。

舞子「ハゲないで……」

百恵「振られました」

舞子「そっか……大丈夫だよ、次があるよ、若いんだから」

百恵「そりゃ先生よりは若いよ、比べられたところで慰めになんないよ」

舞子「そうですよね……ごめんなさい……」

百恵「6回目なんです」

舞子「……何が？」

百恵「光輝くんに告白するの」

舞子「光輝くん……え？ あの子？ まじ

で？ 同じ子に6回？」

百恵「ごめんなさい、強がりました。ほんとは7回目です」

舞子「6回も7回も変わらないよ……すごいね、7回も同じ人に……いや、ほんとすごいよ、それ」

百恵「諦めらんなくて」

舞子、何も言えず、百恵の近くの席に腰掛ける。

百恵「光輝くん、漢字、光り輝くって書いて、
コウキくん。親天才ですよね」

舞子「おお、光り輝く……」

百恵「……よく言うじゃないですか。気持ち
伝えて、振られればスッキリして、次に行
けるよ的な。もう全然で。それもう全然嘘
で。告白するたび好きなんです。好きが超
加速するんです。光り輝いちゃうんです」

舞子「そっか……なんか素敵だねえ、それ。
ちよつと羨ましいよ」

百恵「羨ましい？ ハゲそうですか？」

舞子「十円ハゲくらいにはハゲそうかな」

百恵「羨ましいなんて初めて言われました。

みんなにはいい加減諦めろって」

舞子「他人から、諦めろって言われて諦めら
れたら、そんな楽なことないよね」

百恵、激しく首を縦に振る。

舞子「諦められないって思ってるうちは、諦
めなくていいよ。気持ちの行き場がなくな
っちゃうもん」

百恵「……諦めがついたときは、気持ちほど
ここに行くんですか？」

舞子「……諦めたらわかるよ」

百恵「そっか……てか、先生誰ですか？ 先
生ですか？」

舞子「あ、先生です。えっと、産休の先生の
代理で最近赴任した者です。美園です……
すみません」

百恵「ああ！ 安田ちゃんの代わりの！ バ
レー部で初日からスパイクで袋叩きにされ
たっていう！ 大丈夫でした？ 運動部つ
て怖いですねえ」

舞子「（苦笑して）伝言ゲーム……」

○美園家・リビング（夜）

舞子、深呼吸し、リビングへ入る。

舞子「……ただいま」

優子「おかえんなさい……あ、やだ、舞子の
ご飯まだなのよ。テレビが面白くなって」

と、慌てて台所へ行く。

舞子「（気まずそうに）……ごめん」

優子「ん？ 食べてきたの？」

舞子「いや、昨日の、あれ」

優子「昨日？ お母さんもう年だから何のこ
とかちゃんと説明してくれないと思いでせ
ないですー」

舞子「（笑って）じゃあ、いいや」

優子「今までで一番好きだった人は？ って
聞かれると、大概是実らなかった恋の相手
が思い浮かぶんだって」

舞子「……は？」

優子「さっきテレビで言ったの」

舞子「はあ」

優子「お母さんもそうなの。高校のときの先
輩。卒業式で告白して、あっさり振られち
やっただけど、諦めきれなくて同じ大学受け
て。結局大学不合格で……恋にも大学にも
落ちたの」

と、一人で笑う。

舞子「……残念だったね」

優子「実らなかつたから、好きに踏ん切りがつかないのよ。だから、一番好きな気がしちゃうの。ところがどっこい。実った相手はどう？」

と、床に寝そべる父親を指さす。

舞子「……ゴロゴロしてる」

優子「そう。あのゴロゴロは消しゴムなの」

舞子「消しゴム？」

優子「私の好きを消しちゃうの。すぐそばでゴロゴロされてたら、好きって気持ちに気付かなくもなるわよ」

舞子「実ったら好きじゃなくなっちゃうってこと？」

優子「消しゴムで消されちゃうってこと」

舞子「なにそれ」

優子「でもね、大丈夫なの。消しゴムだから。ちゃんと消しカスが残るから。筆圧が強ければ鉛筆の跡も紙にちゃんと残るから。なくなっちゃうわけじゃないの。見えづらくなるだけなの」

舞子「……消しゴム」

と、父親を見る。

だらしない姿でいびきをかいている。

優子「ちよつとあの消しゴム、寝室に運んでくれる？」

舞子「絶対イヤ」

と、リビングから逃げる。

優子「ちよつとくお母さん腰痛いんだからあ」

リビングには家族写真に混ざり、両親の結婚写真も飾られている。

○上崎高校・階段

正宗、階段を降りているとスマホにLINEの通知。

踊り場で立ち止まりスマホを見る

『悪い。軽音部のほう優先したいから、バンドの話、他あたって。』とメッセージ。

虚ろな表情でスマホを見つめる。

舞子、階段を上がってくる。

正宗に気付き、

舞子「どうした？ こんなところで？」

正宗「人生の方向転換を考えてて」

舞子「……階段は、方向転換してるけど」

正宗「僕、実は軽音部、見学行ったんですよ。
入学してすぐ」

舞子「……そうなんだ。で、下手くそだった
から？」

正宗「基本下手くそでしたよ。大体のみんな
は」

舞子「大体のみんな」

正宗「……一人だけ、めちゃくちゃ上手な先
輩がいて」

舞子「うん」

正宗「女の先輩で。ギターで」

舞子「うん」

正宗「背が低い人で……小さいから、なんか
ギターが大きく見えて。女の子がギター持
ってるっていうよりも、ギターに女の子が
くっついてるみたいなの。先輩、演奏始まる

前にステージ上で髪をさつと束ねたんです。
あの……なんだっけ。女子がよく手首とか
に付けてるやつ。無駄に布使ってる」

舞子「シユシユ？」

正宗「そう！ シユシユ！ 赤いシユシユで、
髪をササって。その時からもう、なんてい
うか、演奏が始まってるんですよ！」

と、目を輝かせ楽しそうに話す。

舞子「（つられて笑い）うん。そうなんだ」

正宗「なんか、全然違くて、他の人と。ある
意味先輩のギターだけ浮いちゃってて、バ
ンドとしてはちよつとアレなくらいで……
すごい上手かったです」

舞子「じゃあ、入ればよかったのに。憧れの
人がいるなら、いいじゃん。羽生さんが将
棋部にいたら藤井聡太くんも将棋部入った
んじゃない？」

正宗「藤井くんは羽生さんと対局してます」

舞子「うん。対局しなよ。ギターで」

正宗「僕は対局前に諦めたんです」

舞子「……」

正宗「あの人がみたいになりたいとか、あの人を超えようとか、そう思えたならよかったけど、僕は、勝てないって、そこでもう諦めて、それで、おしまい」

舞子「……」

正宗「こんな小さい世界で、自分より上手い人はいないって思い込んで。ああーあっさり見つかっちゃったーって、思って。なんか、ショック、みたい。それで入部しませんでした。一番になれないってわかったから、逃げただけです」

舞子「……そっか」

正宗「藤井くんはすごいです。ちゃんと戦ってて。きっと勝つ日がくるんでしょうね、羽生さんに」

舞子「……でも、軽音部に入らなかっただけで、個人的に趣味でギター続けてるんですよ？ 諦めたわけじゃないじゃん」

正宗「趣味ってなんだか知ってますか？」

舞子「趣味……好きなこと、かな」

正宗「仕事にできなかった、好きなことですよ、まっすぐ舞子の目を見る。」

何も言えない舞子。

正宗「好きなことが職業にならなければ、好きなことでお金が稼げなければ、それは趣味です。Youtubeだんだで十代だって音楽で稼いでる奴がいっぱいいるんです。でも僕は、軽音部に入るのすら躊躇った奴です。そんな奴……（笑って）こんな奴です。もう辞めようって、実は、その部活見学のときからずっと考えてて」

舞子、脱力し壁に寄り掛かる。

舞子「私、小学三年生のとき、バレエ辞める！ って言い出したことあって」

正宗「……はい」

舞子「発表会でボロボロで。恥ずかしくて、情けなくて、もうこんな思いたくないって思っ。親にも、バレエ教室の先生や友達にも、みんなに、もう辞める！ って言

って。そう言いながら、毎日トウシューズ
持ち歩いてたの。あ、わかる？ バレエ踊
るときに履く靴」

正宗「……はい」

舞子「本気でギター辞めたいなら、持ち歩か
ないでしょ？ そんな重くて大きいのに、尚
更。ぶつけたとこ、タンコブできてるんだ
からね？ ほら？ 見る？」

正宗「（舞子の頭を見て）……あ、十円ハゲ
になってる」

舞子「！？ え！？ 嘘！？」

正宗「（ニヤニヤして）嘘です」

舞子「……仕事にできなかつたら趣味だよ。

間違いない。……でもね、仕事ってね、し
んどいよ？」

正宗「はい。しんどそうです」

舞子「生徒からしんどそうに見えてんならそ
れはそれで問題なんだけどき。教師的に」

正宗「……方向転換」

舞子「踊り場通るとき、今！ 方向を！ 変

えてるぞ！　って感覚ないじゃん？」

正宗「ないですね」

舞子「そのくらいさ、流れに身を任せてもいいんじゃない？　自立心とか、自己決定とか、そういう教育本に書いてあるようなこと意識して、行き詰って結局どこにも行けなくなっちゃうくらいなら、流れていく方に流れていって、流れ着いた先で考えればいいじゃん……こういうことも言っちゃダメなんだけどさ。教師的には」

正宗「……じゃあ、こっち（階段の上を指さす）から来たんで、あっち（階段の下を指さす）に行きます」

舞子「うん。私逆だからあっち（階段の上を指さす）行くね」

正宗「はい」

と、それぞれの方向へ歩き出す。

正宗、立ち止まり舞子を見上げて、

正宗「先生」

舞子「（階段下を見て）ん？」

正宗「趣味で続けたらどうですか？」

○美園家・リビング（夜）

舞子、スマホでバレエ教室の情報を検索している。

優子「ねえ！ 見て見て！」

舞子「……！ な、なに」

咄嗟にスマホを隠す舞子。

優子「片付けしてたら小学校の卒業文集出て

きたの、ね、見て。おもしろいの」

舞子「いいよ、恥ずかしいから捨てて」

優子「圭介くん、覚えてる？ 駅前の弁当屋

の。将来の夢、総理大臣って書いてんの。

素敵だなあ。弁当屋に生まれて、政界へ」

舞子「あの弁当屋まだやってんの？」

優子「やってるわよ。圭介くんが継いだから」

舞子「政界行ってないじゃん……」

優子「子供の頃の夢を叶える人って、2割く

らいなんだって。テレビで言ってた」

舞子「……そんなにいるんだ」

優子「そう思う？ お母さん、少ないなあつて思っちゃった」

舞子「なりたい職業に就ける人なんて、もつと一握りかと思った」

優子、文集を開き、

優子「（棒読みで）私の将来の夢は、教師になることです」

舞子「は？」

優子「私は本を読むことが好きで、国語が得意なので、国語の教師になりたいです」

舞子「……やめてよ」

優子「バレエも好きなので、部活でバレエがある学校に就職して、バレエ部の先生がしたいです」

舞子「（笑って）バレエ部って」

優子「生徒の悩みを真剣に聞いて、正面から向き合えるような教師になりたいです」

舞子「……」

優子「私が夢を持っているように、夢を持つた子供たちの背中を押せるような存在であ

りたいです」

舞子、涙ぐむ。

優子「舞子すごい。夢叶えてる！ これ持って圭介くんに自慢しに行きな。あんたも総理大臣目指して頑張んなさいって喝入れてきな。……叶えた夢って、ほら、見えづらくなるのよ。見えづらく、なるだけ」

と、舞子に文集を見せる。

舞子「バレリーナになりたいって書いてあると思った」

優子「残念でした」

舞子「2割に入ってた。自覚なかったけど」

優子「ほんとよ！ 教科まで！ 部活の顧問まで！ 全部叶えてる！」

舞子「バレール部ですけどね」

優子「あと、これも出てきた」

と、古いトウシューズを見せる。

舞子「……懐かしい」

優子「これはサイズ変わってないでしょ？
使いなさいよ。もったいないから」

舞子「……新しいの買うよ。初任給で」

優子、驚いて舞子の顔を見る。

舞子、照れ臭くなり、

舞子「趣味でやるだけ。運動不足解消」

優子「……そう」

と、微笑み涙ぐむ。

○上崎高校・二年三組教室

漢文の授業中。

舞子、黒板の板書に教科書を見ながら
レ点や送り仮名を付けていく。

舞子「えーっと、老子ですね。『爪先立つ者は立たず、自らほこる者は長からず』……

爪先立つ……」

と、声が小さく細くなる。

舞子「……あ、すみません……えっと、次ね、
『人を知るは智なり、自らを知る者は明なり』……明……なり……」

と、再び心ここにあらず。

舞子の様子に顔を見合わせざわめく生

徒たち。

舞子、教科書を教壇に置き、思い立つたように、

舞子「諦めるって言葉の語源、知ってる人」
誰も答えない。

舞子「……いないね」

と、踵を少し浮かせる。

舞子「今からする話は、授業の一環です。それ以上でも、それ以下でもありません」

と、勢いよく黒板の板書を消す。

女子生徒「あ、先生、書いてないです……」

舞子「ああ、大丈夫大丈夫。こんなの定期テストと受験でしか役に立たないから」

と、笑顔で消し続ける。

飛鳥「（笑って）定期テストと受験のために授業受けてるんだっつうの」

と、小さくつぶやく。

舞子、黒板に「諦」「明」と書く。

舞子「はい。『諦める』は『明らか』と同じ語源です。詳らかにする。ハッキリさせる

って意味です。辞めるとか放棄するとか：
：そんな意味は、元々はありません」

真剣に話を聞く生徒たち。

舞子「諦めるっていうのは、ポジティブな言葉だと思います。もう叶わないって自分の実力が明らかになった。だから辞める。それが『諦める』です。なにもネガティブなことなんてないと思うんです……私はバレエを諦めたから、教師に戻ってこれました。とても前向きな決断です。諦めが肝心。その通りです。夢は必ず叶う？ 諦めなければ実現できる？（笑って）嘘です。残念だけど、嘘です。それ全部。夢は叶うこともあれば、叶わないこともあります……それでも、夢を諦めたら、また次になにか、夢と呼べなくても、目標とか、抱負とか、そういうの決めて、無理やりでも、適当でも、意地でも良いから決めて、生きてかなきゃいけない」

飛鳥、涙目になりながら舞子をまつす

ぐに見つめる。

舞子「ただ……ただね、夢を、追ったことがある人間だけの特権っていうのもあってね、それは、夢を追いかけたっていう事実です。挑戦したことだけは、褒めてあげられます」

正宗、教科書の下に隠した楽譜を指でなぞる。

舞子「次に何か、新しい何かを、やろうと思ったとき、過去の自分が、ちよつとだけ、ほんのちよつとだけ優しく肩を抱いてくれます。背中を押すってほどじゃないです。そんな大それたことはしてくれないけど、でも、肩にポンって手を置いてくれます」

× × ×
百恵、教室から窓の外をぼんやりと眺めている。

スマホのLINE画面、「光輝」という連絡先を消去する。

× × ×

舞子「それで生きていけるってことも、ある

から。だから大丈夫。みんな、夢が、これはもう無理だなあ、叶わないなあって明らかになったときは、どんどん諦めてこう、諦めて、次に進んでこう」

と、涙目で微笑む。

チャイムの音で我に返り、

舞子「……はい。老子でした！ 老子！ 大

事だからね！ 以上！」

と、足早に教室を出ていく。

○同・廊下く階段

飛鳥「先生！」

飛鳥、踊り場で舞子を引き留める。

舞子、涙を拭い振り返る。

舞子「どうした？」

飛鳥「先生こそどうした」

舞子「老子のありがたいお言葉を読み上げた

ただけけど？」

飛鳥「老子の話、全然してなかったけど」

舞子「老子、良いこと言うよね。私の推し偉

人なの」

と、とぼけて見せる。

飛鳥「ねえ、踊って」

舞子「……え、今？」

飛鳥「うん、今」

舞子「……やだよ、こんなところで」

飛鳥「なんで？ 最適でしょ？」

舞子「なんでよ。狭いし、階段危ないし」

飛鳥「知らないの？ ここ、なんていうか」

舞子「（小声で）……踊り場」

飛鳥「そう、踊り場」

舞子「踊り場……？」

飛鳥「あれ、もしかして語源知らない！？」

国語教師なのに！？」

舞子「ごめんなさい……」

飛鳥「ちよつと、見えて」

飛鳥、階段を駆け上がり、一気に下まで降りる。

訳も分からずその様子を見る舞子。

飛鳥、踊り場に戻りながら、

飛鳥「見た？」

舞子「見たけど」

飛鳥「スカート見た？」

舞子「見たよ」

飛鳥「どう？」

舞子「どうって……うーん、揺れてた」

飛鳥「（嬉しそうに）揺れてたでしょ！？」

舞子「揺れてたけど」

飛鳥「踊ってるみたいでしょ！？」

舞子「……え？　そういう理由でそういう名

前なの？」

飛鳥「そういう理由で踊り場だよ」

舞子「へえ……」

飛鳥「ね！　踊ってよ！　踊り場です！」

舞子「その語源と、ここで今踊ることは関係

ないと思うんだけど」

飛鳥「ちよつとでいいから！　この幅で済む

ことでいいから！　爪先立ちでスッ！　み

たいのだけでいいから！」

舞子「ちよつとバカにしてるでしょ」

飛鳥「してないよ！　ねえ！　お願い！」

舞子、渋々手すりに片手をかけ、姿勢を正す。

ワクワクした表情で見つめる飛鳥。

舞子「……やっぱ嫌」

と、階段を降りていく。

飛鳥「え！？　なんでー！？　やってよ！」

と、舞子の後を追いかける。

踊り場に窓から光が射している。

階段の上からその様子を見ていた正宗、ギターバッグを背負い直し、階段を降りる。

○同・職員室

正宗、舞子のデスクにやってきて、

正宗「先生、これ」

と、舞子に一枚の紙を差し出す。

舞子「ん？」

受け取ると、入部届。

「軽音楽部」と記載されている。

驚いて正宗の顔を見る舞子。

舞子「なんで？」

正宗「もう何度か行っててほぼ入部済みなんだけど、顧問の先生に、担任にも入部届出すようについて言われて。だから」

と、淡々と話す。

舞子「うん、入部届はそうなんだけど……」

正宗「明らかになってないなって」

舞子「……」

正宗「明らかになってないから……僕まだ羽生さんと将棋打ってないから……じゃ」

と、その場を離れる。

舞子「佐藤くん」

正宗、振り返る。

舞子「将棋は打つじゃなくて、指すです。打

つのは囲碁です」

正宗「……国語教師うざ」

と、笑い、職員室を出て行く。

舞子、嬉しそうに入部届を見つめる。

宮内「佐藤、将棋部なんですか？ 意外です

ね」

舞子「（笑って）意外ですよねえ。あ、大学入試の資料って、どこで見れますか？」

宮内「図書室にまとめてあります。4階です。

あ、案内……」

舞子「あ、大丈夫です。一人で」

デスクの下でこっそり靴を履き替える。

「進路希望調査」と書かれた紙の束を持ち、職員室を出る。

○同・階段

舞子、階段を上っている。

踊り場で爪先立ちする生徒の足元に目を引かれる舞子。

百恵、踵をぴよこびよこと上げながら窓の外を眺めている。振り返る。

舞子「（百恵だとわかり）……ああ」

百恵「先生、見て」

と、窓の外を指さす。

舞子「……あ、光り輝くくん」

光輝に一人の女子生徒が駆け寄る。

手を繋いで歩き出す二人。

舞子「（気まずそうに）……あ、えっと。あ、今日宮内先生がバク転で校内巡回するって言ってたから見に行こうか？」

百恵「大丈夫です。あれ、もう知ってるんで大丈夫です」

舞子「……そっか」

百恵「仮に宮内がバク転で校内巡回してるなら、見たくないです」

舞子「だよね。ごめん。私も」

百恵「……諦めがついたときって、気持ちはどこにも行かなくて済むんですね。自分のなかに、落とし込めるっていうか」

舞子「……諦めたんだ」

百恵「はい」

舞子「そっか。おめでとう」

百恵「……恋実ったときに言われたかったです。おめでとうは」

舞子「だよね。でもおめでとうだよ。次行け

るね」

百恵「（照れ笑いして）……実は、もう次が、ちよつとだけ始まってて」

舞子「ほんと！？ 誰？ 学校の子？」

百恵「はい。私、進路決まってるから、部活引退したけど時々顔出してて」

舞子「（興味津々で）うんうん」

百恵「そしたら、最近二年だけど入部した男の子がいるんです。その子に突然、入学した時から憧れてしました！ って。急に言われて」

舞子「（何か引っかけ）……うん」

百恵「じゃあそのときすぐ入部しろよ！ って思っ。でも、なんか嬉しくて。で、LINE交換して、今度一緒にスタジオ練習する約束して。あ、話しましたっけ？ 私軽音部だったんですけど、ギターやってて」

百恵、手首に赤いシユシユ。

舞子、確信を持ち、にやけてしまうのを必死にこらえる。

百恵「その子もギターで。上手なんですよ。」

あ、先生って二年生の国語ですよね？ 名

前言えば知ってるかな、でもよくいる苗字

だしな……いや、やっぱ、内緒です。恥ず

かしいから、まだ内緒。進展あったら教え

てあげますね」

舞子「……羽生さん」

百恵「ハブサン？」

舞子「ううん、なんでもない」

舞子と百恵、踵を上げ下げしながら窓

の外を眺める。

× × ×

舞子、廊下を歩く。

飛鳥「あっ先生いた！ ごめんさっき返して

もらおうと思って、忘れてた」

と、後ろから声をかけられる。

舞子「ん？」

飛鳥「進路希望。書き直していい？」

舞子「……どうぞどうぞ。いくらでも。お好

きなように」

と、紙の束から飛鳥の進路希望調査を
探し、差し出す。

飛鳥「ありがとう」

二人、並んで歩く。

舞子「いろいろあるから悩んじゃうよね」

飛鳥「うん、でも、だいぶ絞れてます」

舞子「バレエ強いところ？」

飛鳥「うーん、それは二の次で。教職とるの
にちゃんと力入れてるところで、いろいろ調
べてて」

舞子「え？」

飛鳥「教職。教員免許。取ろうと思って。体
育教師になりたいなあ、って」

舞子「……教師？ え？ 教師になりたい
の？ まじで言ってる？ いいの？ 教師
でいいの？」

飛鳥「教師がそんな反応しないでよ」

舞子「……ごめん、びっくりしちゃって」

飛鳥「まだね、諦められないの」

舞子「……うん」

飛鳥「だから、バレ―は続ける。県大会ダメでも続ける。たぶん」

舞子「うん」

飛鳥「でも、夢って重複しててもいいんだあって気付いて。なんか、そういう大人がいて。片方はちゃんと叶えたっぽくて」

舞子「叶えたっぽいんだ。そっか」

飛鳥「今はね、欲張って両方頑張るの」

舞子「うん。いいと思うよ。夢ってアレだから、あの、サブスク」

飛鳥「（笑って）元取らなきゃですね」

舞子「ただ、クラシックバレエ部とかの顧問にならないようにだけ、気を付けて」

飛鳥「わかった。気を付けます」

と、晴れやかな表情。

階段に着き、

飛鳥「先生、上？」

舞子「うん、図書室。進路指導の勉強」

飛鳥「大変だね」

舞子「実際に進学する人のほうが大変だよ？」

飛鳥「大変なことって、大変なだけの価値ある？」

舞子「（微笑んで）あるよ。結果が付いてくるとは限らないけどね」

飛鳥「わかった。じゃあ、大変なことする。

また明日」

舞子「また明日」

階段を降りる飛鳥。

階段を上がる舞子。

舞子、踊り場で立ち止まる。

手すりに手をかけ、姿勢を正す。

踵を上げ、爪先を立て、ポーズを正す。

すぐにやめ、階段を上っていく。

タイトル「踊り場にて」

誰もいない踊り場に光が射す。

了